

あると思って探せ

—資料蒐集にあたって—

名誉教授 山崎 慶輝

これは日本仏教の私のゼミ生達に、卒論題目をきめる頃によく話した事項である。

私は若いころ父から次のような話を聞いた。それは父が仏大時代（龍大の前身）に、史学の禿氏祐祥先生の講義をうけて書画骨董に関心をもちだした時の話である。或るとき先生が大蔵經の版木の話をされ、次いでそれが浮世絵の版木に移り「君達みな寺の出だから、今度夏休みに帰省して門徒まわりをしたら、浮世絵（版画）を探して持ってきてなさい。初版刷りとそうでないものの違い、よいものと悪いものの区別ぐらいは常識として知っておくべきだから、おしえてあげる」と。そこで夏休みに帰省して門徒まわりをした時に、「何か昔の版画がないか」と尋ねると、老人達は「明治の中頃、都会の書画骨董屋が田舎を廻り、版画一枚を三錢四錢という高価で買い集めたので、そんなに高く売れるならと、みな売り払って、今は一枚も残っていない」というのである。

休暇が明けて学校へ戻り、禿氏先生の時間にその旨を述べると、これに対する先生の言葉がすばらしく、感銘を受けたというのである。

それは、門徒の古老達が明治の中頃に云々と云ったのは、フェノロサが日本の美をたたえ、浮世絵等を絶賛したので、骨董屋が田舎廻りをして高く買い集めたのだが、中には、手放すのが惜しくて売らなかった人もいただろうし、また襖や衝立てや枕堀風に貼りつけて売れなかったもの。よごれや、破れや、虫くいがあって売れなかったものもある筈だ。「骨董屋に売り払って、何も無い」と云われて、「はい、そうですか」と引きさがったら、それでおしまい、永久に何も出てこない。必ず「ある」と思って、次の帰省時に再度探しなさい、と云われたのである。

それから今日まで集めた版画がなんと七百枚である。ないと思いこめば、それまでだが、「必ずある」と思って探せば、出てくるものである。父はこの禿氏先生の言葉を人生訓の一にして、大正一四年二月朝鮮京城別院へ賛事として赴任した時は、朝鮮陶器の「辰砂」が好事家によって蒐集尽くされた後であったが、それから集めて、立派なものを何点か見つけた。しかしそれも、終戦引揚げ時に、手に持てるだけと限定されて、殆ど残してきた。

日本仏教の研究は日本で資料集めができる。奈良の古寺をはじめ各地に、また図書館にもかくれた資料が豊富にある。この点、インド仏教や中国仏教に比して遙かに恵まれている。その資料集めのときに、「あると思って探せ」。これが私のゼミのモットーであった。そして、人物の研究なら、その人物のゆかりの土地へ行って見よ。寺や図書館や郷土資料家を訪ねてみよ。何か新しいものが得られるであろう。典籍の研究なら、印刷物だけに頼らずに、親しく現物を見る努力を払え。これができるのが日本仏教の長所なのだ。そして、その代表的ものが、学部卒論で『仏教学研究』に掲載された佐藤真由美の「一休寺蔵『祖心紹越書状』」であり、中村暁子の「龍谷大学蔵『三国伝燈記』下巻」である。これらは新資料を「あると思って探した」結果といえよう。